# としょかんぼう

Tohoku Fukushi University Library News



### **Table of Contents**

ブックレビュー (情報福祉マネジメント学科教授 桑原真弓) 東日本大震災からの図書館の歩み (図書館 八巻千穂) (図書館 斉藤由理香) 知ってる?偉人編 (生涯学習支援室 五十嵐智子) わたしの本棚

休館中のあれこれ&編集後記





# – カラダからの大切なメッセージ –

総合マネジメント学部 情報福祉マネジメント学科 教授 桑原真弓

絶叫マシーンやホラー映画などはいつの世にも大人気で、「怖いもの」見たさの好奇心は 止まるところを知らない。ハマる人も多いが、全く受け付けない人や興味がないという人も いて、捉え方は様々である。しかし、本書に出てくる「きたないもの」は、決まって一様に 遠ざけられる。白々しいほど見なかったフリをするのも、スマートなマナーのひとつと言え る。コントロール不可能な生理現象もあるため、正しい理解と適切な対応が望まれる。

でも、変わったものが大好きなこどもたちにとっては、そんなことはお構いなしである。 それがカラダから出てくる得体の知れないものだったりすればなおのこと「それなぁに?」 と恥ずかしくなるほどの大声で聞いてきたり、心を踊らせ好奇心全開の眼差しで観察しまくったりと、まさに大歓迎である・・・が、しかし、時を経ていつしか「きたないもの」と認定したとたんに、不潔さの象徴としてことごとく忌み嫌うようになる。なんとも勝手な話である。というより、こんなに身近なモノなのに本当の顔を知らないなんて残念過ぎる。

そう、ご存知の通り、カラダから出てくる「きたないもの」にはワケがあるのである。

著者は米国で科学教育を専攻した女性科学ライターで、数多くの科学教科書を出版してきており、本書は教育科学絵本としてベストセラーとなった。本を開くと、真っ先に大袈裟で奇抜なイラストが飛び出してくるが、ページを進めていくと、絵本の割には文字数が多いことに気付く。読み聞かせにもピッタリの語りかけてくるような文章は、こども目線でとてもわかり易い表現でありながらも、「その記述は医学的には極めて正確であり、しかも高度なもの」と、訳者で医師の藤田紘一郎氏も大絶賛している。さらに「このままでは感染症への免疫力が弱まり、社会的にも異物排除の思想が広がる」との懸念も示している。

「100 人にききました。鼻くそをほじる人 70 人、そのうちほじった鼻くそをたべる人 3 人・・・」 え?ウソ!ホント?と読み進めると、大腸のぜん動運動や、鼻水を運ぶせん毛、食べかすや細菌である歯垢、などのホンモノたちが、詳細な説明と共にスルリと折り込まれてくる。リアルな表現で度肝を抜き、もっと知りたい!を巧みにくすぐり、ぐいぐいと引き込んでいく。想像しては眉を潜めてしまうようなストーリーでありながら、絶叫マシーンの中毒性を彷彿させる。ただし、ドン引きされないようになのか、リアルな表現とは裏腹に現物の写真は極めて少ない。ユニークでカラフルなイラストに化けたホンモノたちが、絶妙な躍動感で笑いを誘う。でも不意に、クローズアップ写真のホンモノが容赦無く目の前に飛び込んでくるから、気を抜いてはいられない。ホラー級と言ったらさすがに言い過ぎだが、面白いだけでは終わらせないぞと言わんばかりの作者の熱意が、ジワリと伝わってくる。こども向けの絵本でありながらも、カラダから出てくる19の「きたないもの」について正しく理解でき、なぜ「きたないもの」となってしまうのか、どうして大切なメッセージなのかがストンと入ってくる、おとなでも十分に楽しめる本気でホンモノの絵本である。

こんな絵本に出会えたら、毎日、頑張ってくれているカラダへの理解が深まるだけでなく、「きたないもの」たちが発するメッセージにもそっと耳を傾けられて、自分にも周りにも前よりちょっぴり優しくなれるかもしれない、そんな一冊である。

# 『きみのからだのきたないもの学』

講談社 1998

シルビア・ブランゼイ文 ジャック・キーリー絵

藤田紘一郎訳

所 在:絵本

請求記号:726.6/フラ/絵本





# – 東日本大震災からの図書館の歩み –

東日本大震災発生から10年目となる2021年2月13日の午後11時過ぎ、福島県沖を震源とする最大震度6強の余震が宮城、福島を襲った。この地震による被害もさることながら、10年前の図書館への被害は大きく、天井の一部崩壊や書架の転倒、また天井内の配管が破損し、水漏れによる資料への被害もあった。また書架から落下した図書や雑誌は、所蔵する約34万冊の90%以上に及び、その後2011年4月に発生した余震により、再び書架の資料は落下、復旧作業は振りだしに戻った。こういった状況下、館内の復旧はもちろんのこと、南三陸町の図書館への支援や「東日本大震災関係資料コーナー」の構築にも努めてきた。津波により流失した洞福寺を再建された当時の図書館次長への思いも込めて、これまでの本学図書館の震災に関連する活動の軌跡をまとめようと思う。

震災後の4月26日から図書館は開館、約45日間で開架部分の図書・雑誌およそ10万冊の復日は終了した。一冊一冊手作業で書架に資料を並べなおす復日作業は、5月以降図書館を開館しながらには限界があり、短期間学生アルバイトを雇用。20日間にわたり延べ200名が復日作業に参加、7月中旬には延長開館や休日開館も含めた震災前のサービスを開始した。復日作業は暑さとの闘いでもあり、気力体力を消耗するものであった。

また、南三陸町図書館の再開支援 ボランティアにも参加し、全国から 集まった資料の分類作業やカバーが けのほか、畳敷などの肉体労働にも 従事した。

#### 右写真:

【南三陸町図書館での支援の様子】



当初の予定を延長して10月5日の開館日前日まで準備を手伝い、図書館オープンのニュースが流れたときには、安堵とともに本と人を繋ぐ図書館の仕事にあらためて魅力を感じたのである。

さて、阪神淡路大震災を機に災害に関する様々な資料を収集する重要性が認知され、神戸 大学附属図書館は「震災文庫」を設置、これが前例となり、東日本大震災でも早い段階から チラシやフリーペーパーなども含めた広範囲におよぶ資料を収集しようという動きが活発 化し、本学図書館でも「東日本大震災関係資料コーナー」の設置へ向けての準備が進められ た。

> 右写真:【東日本大震災翌日3月12日の 河北新報朝刊一面】

図書館1Fの「東日本大震災関係資料コーナー」には、2021年5月7日現在、和洋図書併せて約4,500冊(絵本含む)、AV資料約180点となり、その中には朝日・毎日・読売、産経、日経の5紙が2011年3月分から2012年3月分までの1年間分、また岩手日報、河北新報、福島民報の3紙は2011年3月分から2016年3月分までの5年間



分、製本された現物が含まれている。河北新報 2011 年 3 月 12 日朝刊には、「宮城震度 7」の大きな文字、8 ページのみの特別形態で発行された紙面からは当時の緊迫した状況がありありと感じられ、現物が醸し出す凄みを痛感するのである。また、宮城県内の社会福祉協議会や医師会、公立学校や外郭団体など 1,500 機関以上に資料の寄贈依頼を送付し、一般の販売ルートには乗らない報告書や記録集などの収集にも努めた。こうして構築された「東日本大震災関係資料コーナー」は、再生の意味を込めて緑色の看板を配している。

このように図書館は、記録と記憶を残す機関として日々資料と真摯に向き合っているのである。







# 知ってる? 偉人編 — 渋沢栄**ーと社会福祉** –

2024 年に 20 年ぶりに紙幣のデザインが一新されます。一万円札の新しい顔としてお目見えする渋沢栄一をみなさんは知っていますか?渋沢栄一は「日本資本主義経済の父」と称されるように、生涯を通じて 500 以上もの事業の設立や運営に携わりました。JR 東日本や東京証券取引所など現在も存続している会社や団体が多数あります。このように近代日本経済の基礎を作り上げた渋沢ですが、社会福祉の発展にも大きく貢献しました。

渋沢と福祉の関係は、院長を務めた東京養育院(現・東京都健康長寿医療センター)から始まります。明治5年、町中のホームレスや心身障害者、孤児などを保護する東京養育院が創設されました。明治7年に東京会議所の共有金取締(後に会頭)となった渋沢は、その管轄内である養育院の運営にも携わることになります。当時の養育院は240人ほどの生活困窮者たちが同じ空間に収容されるような大変酷い環境だったと言います。現状を憂いた渋沢は、真の問題解決には入所に至る原因への対応が必要と考え、収容者に合わせた適切な環境整備や課題対応に取り組みました。渋沢の尽力により養育院は児童の自立支援や病院、貧困者の社会復帰支援を担う機能を併せ持つ施設となり、その後いくつもの社会福祉施設が誕生する母体となりました。

渋沢は養育院の運営以外にも、中央慈善協会(現・全国社会福祉協議会)の初代会長も務め、海外の救済事業の調査の実施や協会の機関誌『慈善』において福祉のあり方について言及するなど、生涯にわたり積極的に社会福祉活動に力を注ぎ続けました。この機関誌は誌名を変え『月刊福祉』として現在でも刊行しています。本学図書館では明治42年の『慈善』創刊号(復刻版)から『月刊福祉』最新号まで所蔵していますので、

渋沢栄一の思想に触れながらこれからの福祉を考えるためのヒントにしてみてはいかがで しょうか。

図書館 斉藤由理香



## わたしの本棚

## ─ DVDと共に文庫本を楽しむ -

生涯学習支援室 五十嵐智子

新学期を迎え、新しい生活を始める新入生の皆さん、そして勉学や目標に日々励む在学生 の皆さん、こんにちは!

新緑の葉が太陽にあたるとキラキラと輝き、きれいだなぁと見とれてしまう季節を迎えています。この「としょかんぽう」が発行する6月は、もう梅雨に入っている頃でしょうか。雨がふると、土のにおいを感じたり、恵みの雨だと思ったり、自然を感じる日も多くなります。

さて、自然を感じ、心にジワリと感動を得られ、エネルギーがわいてくる本があります。

「森の匂いがした。(省略)風が木々を揺らし、ざわざわと葉の鳴る音がする。夜になりかける時間の、森の匂い。」というこの文から始まる物語は、高校生の外村(とむら)が、体育館にあるグランドピアノを調律する板取(いたどり)と出会い、調律することによってピアノの音色がどんどん変わっているさまを体験します。この体験と、調律師の出会いにより、夢を見つけ、叶え、挫折を経験し、また大きな夢を得て、まい進するストーリー。主人公の外村と共に、夢を見つけ、大好きなピアノを弾く双子の姉妹も新たな夢を見つけ、進んでいくことになります。

この本のタイトルは『羊と鋼の森』。2016 年本屋大賞(第13回)を受賞し、2018年6月に 映画が公開、話題にもなりました。この本と出会い、映画からも、年齢を重ねた私でも、や りたいことがあったら、あきらめないで好きなことを続けていこうと、エネルギーが満ち、

心豊かになる大好きな1冊と映画になりました。

見逃してしまった学生の皆さん、今からでも楽しめるんです。本学図書館に文庫本と DVD がありますし、仙台市図書館にも本・DVD が揃っています。本や映画を通して、心のエネルギーを蓄え、日々の生活を楽しんでくださいね。



『羊と鋼の森』 文春文庫 2018

宮下奈都著

所在:ベストセラー

請求記号:ミヤ

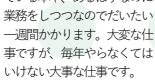
表紙の写真は今年2月に発生した地震後の学生閲覧室 の様子です。揺れで本棚から本が落ちてしまいました。 これはその後どうするのかというと・・・

<del>──────</del>拾って戻します。最も被害があったのが書庫 の4F (→の写真) でした。足の踏み場もないくらい本 が散らばり、こちらも図書館員総出でひたすら拾って戻

すの繰り返しでした。恐らくど この図書館も大変だったことで しょう。かわって左(←)の写真は 蔵書点検の様子です。たまに公 共図書館でも"蔵書点検のために



休館します"と数日間休館することがありますが、本学図書 館でも休館を利用して実施しました。図書館の本には一冊 一冊すべてにバーコードが貼ってあることはお気づきでし たか?貸出の時などにピッとやっている部分です。そのバ ーコードを読み込みます。────手作業で!です。学生 閲覧室には約96000冊の本がありますので96000回ピッ ピッしました。こちらも職員総出です。なぜこのようなこ とをするのかというと、本当に96000冊本があるかどうか 確かめるためです。蔵書点検をすると、置き場所が間違っ ている本や、あるはずなのにない本がわかるのです。通常





コロナ禍で換気の必要性が説かれ、図書館でも窓を開 けて空気を入れ替えています。しかし、入ってくるのは

空気だけにあらず。先日は鳩が入ってきてしまい大騒ぎでした。(\の写真) 他にも洋雑誌書庫を移転したり(クの写真)と、利用者がいなくても図書館の中は いろいろと動いています。

## ~編集後記~

今年もまた新年度がはじまりました。昨年からのコロナ禍の影響で新入生のみならず、2年 生の皆さんもほとんどが図書館を利用したことがないのではないしょうか。学生の内、半数が 図書館の利用経験がないと考えると、本当に恐ろしい状況だと思います。そんな中、少しでも 学生の学習環境を整えようと教員も職員も皆奮闘しています。今号のブックレビューは情マネ の桑原先生がご寄稿してくださいました。ご協力ありがとうございました。ぜひ先生オススメ の本を読んでみてください。 図書館 HP ではこれまでのとしょかんぽうのバックナンバーを 公開しています。利用案内も掲載していますので、ぜひご覧ください (図書館 堀慧子)



図書館 HP

. HE 操区国 民 **☎**022(717)3309

〒981-8522

宣心

畫